羣書類從

二百七十四

和書門 類
九五九五 號
二〇四 函
六 架
六七〇 冊

内閣文庫
和書 類
九五九五 號
六七〇 冊
二一四函
一一八 架

内閣文庫		
番號	和	9595
冊數	670 (346)	
函號	214	39

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

日本政府圖書
元老院圖書記

羣書類從卷第二百七十四　　檢校保己一集

和歌部百二十九　家集四十七

加茂保憲女集

しほしまの世中わかとしの江にそて國のうらはゝき
ちくのりとよろこひしところなく月日のなかにはと
むまれと我身のことなしき日といへるかりそめの年はへる
まくらとのおもひしかれくとさまおもひくるやうはれい
とかといへともまされかのひあるはまつことひさしうさ
えかるかいもしとへとおもきみ法かくーしれとおもふ身をとへぬ

かしうき道ハ世のなかしけそとはゆかすゆくへもしらすくるに
しるひとしられはいかんやひとにかなしいとはちかやみなる非
代よりひと城さうしことのほとに志き清うそて城とふたつと
いへりけるに哥とふいふとへいろもかくまてまうきまくとま
てうの海あこそ世なくふりきうえはへとこそかくなり
ゆふ城海にさかくきのつらわれぬ世へくゆき
も海乃海ことも清さぬ重うたこのうちることもかな
志りぬつらなし又それこそ女さかりきつうひあれ乃
夜ゆうしにかに色海と重清たなさきつ中まむたつ人の
夜しう道とり城のへすのそこにハ姉のあれとたいのそ

こに身城志つむるにはるまさにあらハ世城うむさ乃かに
ありむいてんとやう忍山よいまそてるんのへとうきていのたち
みに身くはのけてこきの夜さうの紫城つさよにし松のくさ
らふこ飛ハよりひとたるにとうたてはうらをりて飛城
たかりとのよにこそ身城もやりしひとらひとしうちね
捨くさきに露よぬまさて葉せうへに井わさるりあか
まうとみし人のつきのそこなる城ちくうむしと身よりの
うしこまへのこるり女ハかしこきた海のうてるのいへ（家）
（刀自）としそもたりてそとしろさて城とつさにつきそてきんへとも
もかなるに八重葎にゆうちら飛て日のひかりたりは海に捨

なかといへるは霞のそのつらつら日く思ひ出せむしのたまふ
つらつらきことまつらせ弟よの我のつらつら花乃色我見を川のく
さ海く成なて我見給ひはわか身のなりしきこといのちは
さいそひ我けこめたらぬ世なまさはけのとおもとわかき
たのこふたのもしても我いまとしのたいゆく海くふ
あか様な数て我おもひへ世いやしきふハ己をとも海
ひとをなし清てなやまいらやひかなることなしけれと
んひとりまなりさてあしたよい志ろたへの夜ふ逢
奈井のまつられおのしき様ハへよハまみとめのやみよ
〳〵しまともひとくあるとさまも殊よおもひをたゝさらく

もひよりさつくれのなかとなりてそこらくをふみさ
なくとさふハおもひなりして水よりきえ渡らくもなし
みゆるくよもとん我はなくさの海よせうらとは
うひあなさ海よりそなしておもしろ砲てふ我なよ
ものおもへたれよりハいとむめつらし絶ての葉を
いひいてたまてまれのかしらとかくあきゆきさ
あらくひとともまつらむよりなきたまとこの華のこ
いふともたれのことはりよいまそ日のかとあのれひ（手）（東）
まとおもへとてれのなつふおもふるとそうまそのちす（あひうイ）
いやまつしはいとののとくりみかぬうたらのちる

いやしける菊の花といへるをさくてこそは端
なし云ふなしの山よ秋のをみちてこそ西の山よ、
妻の花ちるきえのてをあらめならぬもの月のなか
ちりなる紀なるかうらえハしるをあらぬ花橘のさかる
みえちいはさかうくをなとのさま画たくなりと
ねり人をひとよのをとまつる人の此られたるさいなる
りまてらかくしといへとひとよ御さられたる歌人の
をとかちる無イさいえをとかるると法楽の歌をし
ろさまの歌られひとのかしこきなるといへと吾の
ゆきいつこのよもイをとられと枕をえときしのかうさ

ことみて秋のよひのまにんなる枝のぬとちろなくなる
こしはて思ひや送りつるむすイ无なつくひものまつハむなし
かしのなかうらふなはめしくたとやうなるてる紫
はさらめさりしくかしこ紀きとハをなとしいかと思
またや歌のなりこうを代はちとまなやまつのひなり
てれめるやしといふ人よあつなふいのてるふい浅きや
さらむさられとへのんあつのちまそ松りしさとハなく
なくしてうことハれとかわ吉川のこたはきくるか
みへしいやしさんひものとかんさいなすしまく
いひあつめつ述のあるハよみそしあるハえてそちる

としていひあつめしかはこゝろをしもまたかはつくるな
またかくし紀とよまるゝ安川は近江のうみのみなもと也
はさぬへくうきさあつめかはんちのくのまゆこのかこを
まちさあはゆしくんよつまてこの玉水あはまなれ
かおくとぬきさおのひあ川めたるてとこなかるふ
らさしくてくんとこへとやさのよのかきなりく
しとこそてあまなくれみれはなのあえりたかさを
まてそのなかれて法世よ人かきうきまを一つれか
たけのよの海よおとしにてくんと有さふたのち
なにせのさ安川めてさの春夜秋をまさなのまち

川よてくるゝ白のをしのからかにもたゝ袖たをろまのなへさま
おこまるをこなしれさやこの家んをしか第世のかき
みゆかりくの山さやのよきあやもちやゝせふかなとかる
せきさうまゆるやく北一日よりあはあまのそくなる人を
傍しちひろのい数のうきとこふかし是かきこそなま
秋来の御代よなきさしのくあよ流の立せぬまつおひ
たかうきてゝいんなかにおち旅業しまれかせらましさ
またいつきせぬあしのうり平川おもおやしとつめる
まねちくのなとおろすとまかりひあからくきよみうさし
なそなくてらかられたるらをなくかちこたなひさ

わかきの木草のもとをとる人へとり出もしはつくさのつま
人のよろこひをなし　さかゆくと見る雲のくもゐ池の
松との花のあひこともの水とさへうつりまし川の辛を
さ春よう夜また雨よ蔭をひかりこまきの夜あかしやう
なるかしろさのゝわかさしとふろとへのさゝ紀松か
井くのうつるよ雨の獄さ及日のさこゝろを年かさを
あさ紀をうつる人まいり雨川まかてくるのかゝのあ
つすことをとられたしよ忘よまつへむ免のえよこさ井る
當なりのをさなかして海さいつくなとあさ天そふ
うらふかなかむしろさおかまてなをまるひとなるよあ

なをそかゝしらまつりさこれをさる女君うらめしめれ侍しさうしを　歯固
いひやりめてあゆのくちかろうしをのきもうらまぬ
をちのうへをとりしてもるけさゆくさすさとえんそかこも
桂ふさぬさいてひをほしをかたまさうひてあつかちへか
ゆるさぬとの紫袋への海くよき物のりむ海しわかきよ
あひては草のいろなるよ殊さしよ清ま袋のさあさそかれ
袋ハたをうしまちくてうちをたちてるさ海ともいつ
とみあろけしてよえと見袋をうあ海里らくれいの
夢くろあしよあまりていへゆるし海らよろこひのや
のたふもしくこなとよひあさまあわかきよやう

くまなかりしほとくたよのひしおれかくおつる水よ
うちはらひまてあらしのおとたちさわくとてなにとなく絲
ひて卯花ともさねところくやこゑろひて山内
ちくさ虫のゆくにくものひさかたのとく入かたとせしかい
おとろきそやうしく海と見る月のかつらをおりくらの
ともしとてそよねりてく海ひたるも見えあれとて山くいを
あやしろのところなく露のいろのもかいしぬさかき
さしゆいたるよかけていそのぬ人あくさいくおとより
郭公の声さえたれあるほとよりくま絹のあやかえ葉
をも恋とさあしかりし浅茅か中のよもさまともあらな

いてく清ままさしあたるらう人へめ出しもたまさこひちに
おほえたるりかあらんかなちうたふかとよ月日つもる
をかはぬさまたまの梅くまてあかのみ水かたく人の嶽に
海のせてさて見えひねもすにあくうりせこの津進せ
すりいのちんかそくくしのねたる梅かやこふとる
わするまたらの鶯の日のかさむしのまとおもしのひのかに
れ出ちく見えりやとまつ暮のけ絨いとおもれり出をも忘れ
つの糸のかさなるよ大原のさとをしひたえこさしぬてな
ひかもさしぬこかりとよもひこいとひくあいけしに
くといふかとふよ御手間にかのかる梅なたちよ

うけるなハわくるつミよふるゆきのまのそらくもこゐ（らさイ）
まよりやはるかなうきを見ゆる月みてそあはれみ拾る類、
たへるひ光いろをそめつくあさふハなまゆきのそみち
あのくころのき雨をふらいろひかりうるて雨ふたらむ
昔れりこのちさわる月日流まちくしのひの流あと
をとうちさ王そとに婦まさたつ孫よあハぬてらく流かりし
めつる志くてのまくひろりしのいとあるくわたる数多流の
あ志ろ多き迷あるくうらさてもなすらハ去いまく
之あしとつふうらめあるくまれりあふあかつまのるみ
らととおもしうる路とあつめてうつふりしあさ流の冬

はしめ久るありあかむあめはちれかうとひ久るりゆり
た志をあるむさしあふさはしめくらりしひとハをとのゝ
んのこしうさともちくちとせとちさうち志つぬとの
くるとのゝ世をいくさるつねの花とまそ人とをたくた
数をうら光けくあれくるすくは久ろのぬうこちと
世流らしきあけ久れき流よらくこうき流あるへあい
るし見えしなかとよろめし久れある哉あくよかへりく
ちさあしかりあるくうくちうひしとのくさ
あくとさしぬ迷てと七夕ハゆしと桂のふめるなごあへし
たをやけまのへよくれすき行るひく拾ふる迷またひ

とくゆくなとよむ山の松をみて海てりしをみくねき
もちつきのこ海といふ所をすぎ川をわたりてやあらん
うきのこゑ秋てふ海そうもし声んくましこそ山さとり
小男鹿の鳴く萩のした葉をつくづくとながめてくらむなるを
なる女くろかくちさきなし ひとは残りいとそうなつへ
たかうゐ残くらるとおもひくるよたけのなかき秋を
あかしう旅ては春日とおもひる紫いはまるもみぢうつ色残
んふ志きてかのいふ月のひかりをそてぬらしなとす
よひもつらきとは世うくるの虫の声をはなしいくるの
まはりて西本そてば菅生川のくれりかの宿るあ

んやとうかすと宿はよそなりけるほどにたちとてきこゆ
わるねかひてあさうかり志なめるこそ忘れおもふなかしの
東路と露く宿の井くこしのあしくよむともかし
よわこゑもくはめのあさてとみよささままくうたの
（しるイ）月みる人もなくてむくくまの宿をおもうてうひのまよ
んさいうすもとよねなやきわくくしきう紫とおもひて
やま井志くくきれきこゑも出しくてふみ道ともつらに
とりふやいうある松れなう人へ宿山の麓の道ゆうらき
らぬ日うきを残うさしてまひあそふなとり旅ふさむ
あくうりて山わけいのりしとさたくて飛鳥ところひす

さとにはゆきりしやかやとりかゝりたえく森つゝなひつゝそ
このおりひ海を隔してあしかそのまへの中のせときわひ
て給さめの麻のかゝりのきをあかれかをてらわてゝまそ
おりひやまもてなくらをぬとおほつかしとあなをさそ
まゆのわ巻かとのてもそつかまてゝをまそたはいかよ 楔
かれはとの志りうしてまんて織まつてすまつてはひをを
かつのまんてゝるさをまへゆきにあのねとのゝゆき織よさ
た太布ゝと志へつまはまりとらしは いをにみ織せも
つるあとと拙まへまとやりいつるあとの糸せにあれもく
かうまつうしくよきしれてりそあまくとさえそてつ

志かとおやよふにあひみむとはてかわらのへまとらくともにしかむ
とんかとたかゝてきてかしこうらあしきそいつしかと提
かゝるぬめるうくとこはつきてよくうちぬ世中の人のち
手きかへもとこゝろへとは何事かあしひかあしくむされたこそ
ひとのしろとそてあくれひはめこ者くいしてをこらよらず
やそゐるく孫のひとそのへりいてくとのかいのちをとは
すれりあえよとひよのへとかをそこある秋とへあみ
ちかえらとのへは海ゝてそたかせよきならてかつをすなとわ
してとたるものかのこねるゝにはよあつねあゝぬまや
あらむされといひてるよとをいうしきえせむよせなる

たちかへりてそれは極楽いのちをところさすまでこの身を
うきよのなかにくらまへかれすゝらふく此かりしは人ひとや
ふかれは為我苦身ろのうちの中より人の世話せしはをなり
かうらいの山の峯のこうをつくるも竜をはからる輩ら
このてあかきこゝろのみむすめしかしりのあきなきもあめのした
あるる世中そのとくゑくちぬつゐんあるまなゐ輩ら
世中はしまの輩ともむなしかれんのたくさといふ世界
ます猿あして本む男女は行ふるみの繁のことねあらそ
おもひくるはものなるはせまへおりけるよおんなくさぞ
その方そのこゝろひろうかうてうしとくにかはしく人を

なをねさるきはけるさことさうこめけるひとみおもき
ゆうのめせされはたのきいやしきなるゑとのまことあま
いつものなかさいやしきあるかなるしかいますそふしめ
とてたかき女をいやし紀ねとこん名のおかいやし紀
女のをたかき男あるへられは初とも女のあかとけて定
わひてよくせよまのせるる海きよくねのし人のこゝろ
てうくもあしくもあのかわれそなむさいえ定いまに
さきまうさうなるこのねなりし人のこともおのなま
むかしたかきいやしきなくみ部んりあるかそるあき
おしかくうふりよりつねなきてかとしくふといひ

なれとこのんといふ事のつよくあるらしもをかめつゝ
しくみ川のなかりんさしきつらしいひなける
きのことくたなきやのなけるやおりいかなたまりき
ふそくなのちらさなるくまいりなるふくつといふ致
つ東てれなりしさらゆかりらとそやまと前とそえ
かゝしあさの山をもしひいてあんつのゝ人ふの東
返て住むといひあつさのきまのられよひさうてはのよの
志佐よまらちつゝひなとのゝへ法こともふうちらひて
うさてなるをこなのきこともといひて法けなゆくさえ我ち
きつ道はあれよれをしらぬゆうたすの佐くるとおのきもを

見たまへのしろうへむ佐のくやうらかといへき月の
本のゝなるりゆきくまのゝふしてい道はいと松太の
なすのやたのもしらひくてそといへと月よふひのれて
ゐなよあぬへられえたてあまのゝつきをのむらしふてもと
いひてうのれくさくるまたるのの東をさへたそく
たなるしきをあ東ゆく我ねむよそなあしこ志三五
あ弟はあきくさうれとしてたちぬ道ハことなし
ひよられをまくをはをあくれふのまたわからふにそあわ
とそまさとうよころれをへんかうらよえへるのつまる
まさうてれをへとうへよハつ道なしのおいるとそくに

のうらなるくにまうつへ海のきしにそひてゆくとなきさうち
ふしてまた川中にいれはつるあやしう雲なしといひつく
らむくへのきをふかくしてまた二川まてまたりかくれるほと
ん程なりふかまて絶にたえすなかつくしみいつかきのつるを
かうしひともむまふそはたの海といひかくともましこのみちを
見そいまあかられたきの御堂たよるの海へすなとしもの
さことよなしつきしうらきこちらかへ此霧まてなくれくと
みなとよ松をこつなきあれよる麻よ吾孫とうかへ海ん
そいかは行しすくなきそはおくいたるなうたちぬつう
なきくなかりとらうらのあまなれいひとこそ此あなくそ掟なる

よかなくいなひのくいなひくてもしのまよいかむしかあなたち
りいへきそのききまくなしの夏この事る古くなるそな
きまよかれらやまえへよやなくなきつまるくのそふさきに紀
た吉かくあふこれ川くまのうことうしこつきぬ人ゆくよ
秋ねをりよきひろくしよそあのこのそのとくのへしまた
なりゆめよた海しねてあくのうしなのなるのきうそふ
んたを海とのにまつて氷をのとるるまつるし松を小雁
小中ふつきとうりまつてくうらかさ夜やうくあきゆき
日さうしいつかまそあしたのとこそのうくれのやそれく
あられはあすとも夫しぬ世中よなそかとうまつそつのうよ

のよみていくらなまとハなまとまもしゝやむとられ覚かくかりし抱
起をしろしといへとつゐふたえてやかてある起を三つあるさ
さらにつねよりもまさるハ露とふりとなれなむしみらかさとらる
まさる花よなとのハそまめしよせん鶴なしのことに出よまなハい
そのみをとせ袖うそへんりるかやこた猪出てるさとのハ覚
とけさるなをえ乃こさむられるこるかめ衣な猪かハ青木
をのハめつらしきよかをんつゆ乃いのち代本とあさうあめ
しかまぬさゝさ小たハ小きをて連なハ青本とのハたえれなよ
もせ覚とれとこハいのこのいのにとりん成けて心すきす
られ正りん世いうこめあのとをこ世なよこのしまかせさ

小をさりしるあめてい起こ川のいとひろくあてをのむてさあ乃
そし起をことまていひつついひあけむるかあてしを松けそを
うとひとえしら小かさりかしてのくらをとりよやうるのこの
雨ハあめのこゝとの服附小をのそことりふをの松てあてやみ
の数なきの小かをうらあるをんかよろ流のひとよをと旅の
のあさるあの小あちてをつとも袖るす出られてやこるこのさ
のを小をあられ花村くのやまひ袖うし起るとうらうし
てこの雨よわるんようへまそるこの形と色語りし咲
秋のをりのあつまされハ葉末をの糊をやうくかれぬそいく
つまつくなする海く小めつらしきやまひあるまとて二語のさの

たゞやこ紙のまそぞろにしおやまひさるてにようくなむ見えん語て
ゆかしくおもひぬへしとていさゝかいろをもいさゝか添たて
んひとつにおもひてかの男ぬくゝなきてとよの中のつれ
なれこもとなすのむるゆかへそゝろまたゆるむしとよとあれ
ら絶まあきらのたゆ志ら残かゝりまそうゝとあくちとを
志てからゆきをハんひとつにけゝ気なと志てうなくさめて
あらしうらしまうえるひとハさりとそやゆひたうし
うちめつねかにひ人なむこ残をこのむかハなといへと打
いまさすわつかにそこて家とうへてみんと志あるをきわ
やゆひかつきて志つ絶ぬとまゝくをうまにゝ見ゆしく

かゝるて残をこひこ気てや無こたへやよろしからむ世
けるむるよす残ありの事そうなてとをいのなるひとらん
んをかりゝるひとゝなをいくてたなよりのひとのあそ
れへたれハ有りせなかるきたいをきてまるひとゝもあしたく
よゆうしときをおそしろきまゝ遣ハ名をさらてきゝゐの
うらまえこて行き川の白ふもんのうらにハ此きさめ事
くらしあかりてこゝえまうひあとす遣ハけてまる志ふ世
まくてのきあ川むるてをけてぬたくすえしよかく有き
志とんを抱くりうきおくまうくへまてハたまつよこのま
けるゆるてとなりしもうきのけうあまぬなさくへやこそれた

海くらうこゝに松かしろきよりみちをひきのさいさちられハ
松かとひあまりて
白きつ激しくさやかに水を粉よりみちそてあかくさんてとめ
一所月待花尓ひかりひあまりてハあかうくともあるへし
春霧たれひきやつるゝふかやなへてくさ本を花まろつく
青晴ぬあさ海のたかまよいつ去つくふハ露のくちやうふ
浪あ詠つきたゝせぬてるひかちうき張を已をふあそふをかう
常ハ松しむとやすくあさくるをちのゆく香ハ花の名詠ふ
さ夜ちらくて孫うろ浪乃をとすと也よ枝けたる風氷出くらん
松ひかて底代をいひらるふしま道あるあとをさくとゆる秋書

うらすくたるつく霧をすれてさハあさうにも鶴は花を乗めり
わかさゝのみちたつ雲をきてぬめりくふしやかへ小石菜摘らん
ちるをに人くれゆ道と雑ぬなるあし代の枝ひかうちうくみる
人のよにう紀ある香ハかよふかしらへのさくさもきかりそあ
春弱のすきむるよとのわかるきをつまあかしらぬ梅まそまける
花まさえうつしあをせむ孫の毛とくとうちきよ風ちくすゑ也
春代殿小花なろむとてさ枝くさんかすもあしぬつ海をとまつる
鶯乃花のえをれ去間たひてあすをいるひまゆるきさなるも也
古き海世代花の小しき花春風のたちきそ清とへうへ阿一人全
春く去つる詠こうるくまるたねしあ進ハうへはまをせて蛙鳴あり

こゝろもあへぬ花をおしむとふる日よりさしつゝけやすく露ぞなく
春霞たなひきわたる春柳の糸いとふかにみよるかとそえみかし
梅にはや鶯はなきたちそむるなかさき春風日の南面 かくてふかしき
くる比はけふこそめをえつや打むれてうかれ行人のゆくらん
春梅乃にほひまやいをはかく侍らん露のせるの春は細かくし移て
山川をわたるむかしをみなもちてたちて春は遊行にもその
春雨よ野山をいろくそめてそのゝ人乃衣はぬれそむ
わかつきはみきりくかもをそらなりをしたみかくはなまされけり
桜花よりもひかりたるとふかちゝはちつるのなくなくり
かもそ香をもこえ花なにやとはやはるふかきは敷のこゝろあむ

わかなりこゝろえとひかりをなしてあくれは紫にさむ藤なみかゝれるかな
花はえまえねうちかゝりよるこゝろありとも春はとはゝやうの名に
香をかけく人乃たちむかむ色つゝかくるはくれをとはかしまつらん
あつ海はいはまのせし鶏はなふかいて色に出あまてこよ春ひさしき
桜花えゝくにはつ梅をとく遊して出しこる数流れ乃こゝろぬるかは
春雨はあをは遊くうちをわくつゝにあき迄はやいしまこるは花乃ちん
ちるたてはあのめにを梅るあわれかうるとなきにつゝあくるをひまもまらん
うきさよにはいをあれとをかるやとゝ遊ひて我身を風にはあせくつへき

夏

うれせこ行とおもふにかゝはらる川家人乃ろをいそてと行らん

しらまよふさやける卯花いつちとその世にいふつ夜もけしを
峯をふもやうらひとはやひそふかし小舟の来る寺すく頬らん
わかれゆき秋の野に帰て哥思ひ清ひやせ雨しけにあるなきを
夜をまちは桃小すへく頬にそのたひゆく人のやとにかゝらん
かつらなる袖ちかしこを郭公むかしの人乃すひしかるらん
里をとにさとふかゝるゝならくきすねてこそかすむ絶にはけるを
まかる夜のみえぬ中に紋よ山よたすきこそかくて来て見て河へ人やこ
名ふみ遠へは参小そいてよらる思ひつ頭れをさめし山をのむきくを
梯となる飛ゆるきのせ郭公柿のひる雨めくきこゝかにおは峰きを
ひとまては雲てくらのる飛て札ゆとそくなくはるる麦は夜ならき
むら雨きえゆこ雨て白ふ柱わかけゆを有なくひまやすらん
五月山しかもよくに時るたゝさゝへとりよく小夜にゝらん
名ふ人の遠へは雨のそなもあかわけ里あやめはまの庵のにて
時るたひ小あゝりや此ことは庭やあなきのやとに清雨る
枝よりら家はさる橋の花香ふひときりあふるを
雨こそと稚きて見てしかあくし世はこの五月雨にけふ初をと
独ここを小たぬき寺すくわ五月雨とせらふもへ小ちへへきうる
あしかへ見まきて水むせら雨ことを常かきをともへ人かゝ人とる也やふ
秋やぬさたんたゝ頬あきるけさやきて夜ゆ袖紙ひまぬらしつる
小倉山ひと見ゆるかとはやとの道は常をたくかけて嶺二年の

てれるひ小寄河俵ことひ一首とよめてハなのかほまやまさらん
くれなゐの岩根か池水とくるかとはすれすゝるひとや
まつのよの菜刈笛になかれくかへるさかなし　夕暮乃花
あくまの菜をこてゝ暮日小をひとりなかむる袖のつゆに
るかと声さすみふかむむきの秋をきゝさむ　せミのこゑを

六月せミの声　むしさの秋をしる
せミにあらかくさかれしる夜菜え岸根くかせの袖をすさむる
夜すミてかくことすゝめる夜は月ハとひかし露の鳴なくはこら
五月雨の空かのそらにかくれる孫なかとまのなとまし也けり
てかゆかれと枕ひねをもろきかりえをあつさそまさるとおもやてさく

昔ぬきふかきなくたつすあはれいく代人の声をとはらん
あをしこのはむそはましきさとこまつをよるしをえあのかりかる
えつしときかりて一種とるし夜はにほにはるかのなかまるか
秋みての清ありのきをみ月の月あらし入新れしき夜小をあかし

秋

霜海よふ秋八きふ夕日をとられと秋のもひて菜小いまやきたく
七夕乃あまの川船秋とよりいなる年かの絶てひらくらん
七夕はかけるあさの袖ひちて年のとかけるかさて絶のかし
七夕はかし　夜を秋とふ風小よのへまおひてをらんかし
女郎花日とやたのめてこひはらむいゐとのきたる秋は夕暮

秋の野にてならしそつる駒のたえ/\くらしく露そこほしかる
たちふれはかたむすびしとすむしのこゑをきゝつゝ秋はつるらしき
山田もる我衣手に露しくなきをしらぬ葉にしてもうつろはなくに
木のめきしひかりのかけに秋の田のこゝろのいろにのみか
山田もるいほりはさむけれともやまかくれそて秋はしる露
秋風にあはれ穂のみとるをちかきてねよみてわたて庵はさこふるか
秋霧はしめやひとつ雲たにおもひのその庵のうちひかりけらん
鴫なくそなた紀のそれかいりつきぬしくうらあれは聲はなかし
小男鹿の声たにたえぬ秋とそや萩のしらつもいろにいてぬらん
風ふくは秋の白露はらひあひて法にもみちもいろにいてけるか
見わたせは浪と秋みゆる穂の上に帆まてあきて舟や漕わたるらん
者ちらん浦すてらひわたる雨見えなりにぬきさせん人そ忘れかねる
小男鹿はしからこゝろを穂の花の露はこほすとあまる
秋風はさむきとまにかきおひかさねて人そこひしき
帷子たにしほなれるあきかりのもみちはんやまとなりくもかし
しら露のきゆは浦を分しもと下葉にたえすきむすふ秋のよの風
冬
志賀のうら風さえまさりたるうたゝねしけもんかとりやまきくるかしはる
ふきはらひよもの山こほとにゆきさかへさくらのいろのそいりまさつらん
秋の夜は衣ものこゝとまとろむ窓のうちには志らるゝやはたゝらん

秋のたゝさなからとし紙へてくれ〳〵のことなくなき月日也なれ
あえよとて菊はさへて霧のこゑともなきかしおもひのへはさるとなの
もみち染てさめく秋になきさるもさへてなす葉本袖紙ひの連ぬるか
山かはのなかれなる紅葉なるあかき宝れとやこたするよるなり錦也なの
野山霧は月川たきくみあはれくらこれいくなし秋よくるかたらすん
晴らし盛せよのこたの紅かよの中を晴こ晴よはも晴あきゆこらなき
もみち染けなのさへて山は晴しらひてこのしろなくぬいろなき川
あせこなかはなることねてからなかねしとかうへよ紅葉の袖はうへてなの
紅葉あたへは秋かなさへもあよ秋中をみむろの山は名のこたまのなの
秋風よのれなし人をもひら千秋ともさくろ月しか連やさへつらん

蔵は秋人かへりぬくさひ宝は山はかれしさ紙なこゝろをすちそく
水ともみかつれゆく秋へは花薄露水のこゑもむすそれなれなき
うちは人まくいもことるもしのあれ秋指とは里させてふしきやなに宮の

冬　さらまでは あさくらへの

わきつこ小風浪花のし様を日をとしつとあねさて冬代さぬ連は
冬紙のこゝうしなき夜ともへはまとむなのへいゆこいは旅なの
もみち葉のはをれはうへもりとさ秋のなくるはさこて梅紙社之
今宵のせよなよ連あや菊の花は秋はもうてぬいろそのなしき
たくれゆく紙たちよ後はさのなはたのむうひなく成ぬなるか
山人のあしなうへしもこさとうへてみちかいかまでなけき高人

冬の野に枯むすほれたる花薄むすひし袖のつゆのまよひに
冬枯の野のこほりもとけはてん其ゆふ風に霜を払て
人をまつしもよをせぬ山里にたまつはしらしあらしふくなる
ゆきはてゝよひのまみえしあとたえてかよひし山のちかくなひそふる
霜晴ぬあしたのみちは猶さえてさむさの冬はふかゆく
志ろたへの雲にいろはうつろへる冬の山かせこゝろへたまよ
ひさかたの日てるそらもあらし冬枯の野辺にしほれてはてゝみえすそ
かきくもりてふるまつしあしもえしれぬはやまのやまかぜ
冬さむみ池の鴨のうはかきもとちぬよひにこほるなみ
冬かはのあさひまよひにふかきのりさせてまちるまとふ

冬ふかき人もかよはぬ山里の雪のあさみちたえてゆきか
のさとのゝまろてゝ冬あれし山のくさまてもこちや山ねさん
山川のいさゝかなるはきよらなる風にもありてふきむすふまて
あさなあさなしもふきとちてしみこほりそむ冬はますゝまて
わさの岸わたりて見る山ほ山川の見えけふのあさしたにもとくへ
白妙の鶴の毛さへとく霜の雪まつて見る波にもまよふ朝
冬枯の夕へは木の葉も雪ふりもよほして入あらしに池のまよ
冬の夜風よりの寒さに松ゑたまつに降しく山にさへ
いしまゆふこきまるのねのかくれと年をふるめる山にとおもひぬ
ことひとせるいつまでかこはすきのとまりせつゝまのうれて

あしたの声をきくよりあはて我恋ハ一夜ハかりのよろこひに今そ嬉なけり
菅田観音ハたゝ二のかれよりひかれ入に志てぬるひそかにいき
霊験あらたにてちかひの小舟ハ扉の御前のみあまりよりもちかくこそあれ
程へても我身ハよろつに不思議の事共とも人々しられぬ恋にかなふらん
ゆきたのきこちあきハ　わきまへあれやあとゝとえひとせにわかれゝ人ゝこそ恋しさ
娘となりくらこよえひすの有き絵にいさくろ鏡いそくる程よそ見えてさる
涙すてをりひくてまちかけひへ来りて人形の程よそ見えにけり
いひてといへとまそうと御祝のきんの事いきわしていつる御なりひを
あまてゐるもちしあそなむまとよくそふさきさんいふそこきは
風あ弟ハ木の三の聲を御かなのれあしかとれきてハ夫婦の盃
君をかきこてひとつのあはれたまのとくさえかゆりぬハいのちたゆるまきを
たのめねとみつとにたのきこに袖比をよせくすことわりかき
扇のかしさくなきもさけぬまといひあつらたらとうなう涙れぬんあるらん
くかうあひとはかくこむるあふさうといそくんの袖ほりへきらん
又ぬ人を恋ひ此よわりにこひそめて嬉しあと流へよ涙とふりあふ
たらひたすくいのちたとあかわのすひよいのあるへ
あふてふ此恋井とをくてわかこひいのちふかくよふ成と此のみしき
く涙ちとらあとふなけしぬかよふたよみつらみてぬいきのよりある
たゆつき此いのち我のきし我恋のあへくこ涙へをたなき給ふつる
こたれつてまひとてそなれむまきこむ涙此み道てあやすつこあらたくよ

いつみてぬるとかくこゝにもあらつ梅をかりうるへひとやうりなん

あしかきかみすりかよみくはあらきたまさかにもおもはゝかぬ逢はて

逢て不逢恋

志ぬといへともなほ逢しねかはのかきしみそくらは入相のかね

ひとつをたのむよるはたゝ逢つきみはかひをやはうきさへひき

なかなかにも語りしあのねさりけよ見えてあひりき君にもあふ

まつといひて君をみとらむいかよりくれとけ約かけよちよくへみ

あくまてもし恋にいわか身はさてにせはゆくしれくはぬとはいかにまし

あらしそはわかみしかれけれうきを人にぬれきぬとはいひしりかえん

なすくさしやとおもひかゝるはそれなるかたなれば見てもなか／＼こそあふ

あふ夜にはいのちよかりし逢ぬるもかなきてかひて見はへく

くれなゐのこゝろつくれすめぬるもこゝろをきつくこれならてあかぬいろかな

ひとの物よあはしと思ひし待ちつきをけさもかく声からやまさか

あふことはあかぬよあらん契りしのつめも見えてぬ捨めぬんはてそ逢

逢てあはぬ恋

みし人のこゝろかしねともさよさきてねさめにたくかゝひらひるる

見えたりも待ちとりしんかひぬ逢はあたそもいのちあかりえん

志つらいとのいかなるなすつゝ語ひろんうちちへ事しかまきうりひま

おりぬてふあひみしと紀のことのそくつきにかくる梅のそまくる

こひわひておもくきにのことひいれんひとつ身にあるんはてそ

しきのうたこひ許とくけるをのりたまひてさうしにかき
あそれする　あるかたひゆく人のたもし給ふことかあり
はけく侍らん川うこのかるはなる山寺にんすくてたちとけ
おはりこのもとふめともて経よむ聲はつうとくきこ
ゆるふうこ山くよ孫の濁流ともあひてあり過るほと聞えれ
はや乃なるかわつかふてひとはゆくこゑんかそきかくあむ
侍ひともまいるもかくおほこと許つかさるはへまこのへの
行秋かえかる佐も程りしきかかそらよりののりせそ
ゆくかとはあそれするよふことなとすへていひつくすへうも
あらねはたてりしあらあるのんかそきやとよつまくと雨乃

あき残たよつめいしるとおなき侍あことそかうるしむまれとなと
志不あしてそ律まぞ侍かきくよ孫は移くの丁急とかきとあけつる
多もあまやうに侍こえる佐りふれのれぬるむしをいをとり人侍るむ
雨よ過かはいかにそしろふうしかう残いつ過すれかいきゆるとうり人侍
わうつこよあとの侍かくりとわるもえそてなくり人経る世中はうさ
いそのうきにもしかやくあすの風といとうしこしかむる君かえすき
あしきのやはひやむて始不うはのふかきよる風もあらしとも程りに
うひけとも有はつらきしえ有れ孫はいつこ小もとよるあみくえわ
うすめのしひとむすゑし菜侍くらもみちするすそわ過は魚よなわ
あさくまて程りひつそしあ是はよくおうこともちはみけるの

とほよのそらてたつひめもすさし　みちみち

すめしきもやさきかのそめハさみちてなかくみの海はちかうらくあ

小たへぬくさ

かとなくにけりきしん筏とふれき人ゑかぬかりてときおやまちを

ふえくつときうしのとのころあなみなるよのえくすなる交服ちり

かけともかえしする月をうきさなれこせをよるは海みなそなをろ

わつもくよふかまなみなするなれしをまやなみきこよしゆゑん

あしろのひをそへうらにて

さ夜をなきうらてなきえあしろきの絶なしうちなる小なれきよき

さ夜ひくきかそよふく風よみきつらなみうきるんさとあなたをせ

うらわきて吹風によるす夜ひときなよらつうつひあつり宿るらん

よふかい道て月のうきうはまきなれとてゆふたきとりのあみをかける

人めなき山小をみとくいきつきとゝくれぬよのそうまて也らの

ひをのくし

さやきせをあきさこいたゝふねなしうらもひをそそかはなをとえぬ旅し

うら浪をこによるこくみ絲ハあハれなるみなへなるみなやそかひなし

あしまつのこゑけへ人をにかくれせハ河をれをいつて宿ふきつかし

たなうつまつくとのうちてまむちとん粉本つかなきふくとゆく

ちきりをあ道ハいつ結うれむ也まなかとをうひこめくちてそなの

乃こみのへかてハ君はうきこらをわやのむすくるんのうらり

いつゝあらくひろくむしとおもしくこゝろのあさくみえれはなかのう
めでたくおもひきこえてつくれしたまやのくるしさをこれはいろ
まへともひなくひあなうしきくなすらちまきのうしこそ
しうとおほ殿りとひあつくいふなくさまさくてまつりをきゆる
とはおもひつくおもきみの御こゝろはらのみかことはいまやくらたちまち
しけなるとさへえつるにこゝとこさくひとくいうひするとやさら
らはなあまへるにわかれのをたのしときうくよせく
みとらへしするにせんきてたしむすめをあつかなれし人なとさ
あしてひとつきのものたりふてくおもはゆとのいまるうひおしと
こゝひつくおほ殿よるにくわくのせさひとよりこゝろよさにみる

おもしくしふをおもふやとてさらなくはなくまなよりも殿あつし
さるもしとういふおもふとうし月おとまこ様るこゝのいそうぬ物まゐる
はまゐくとうるてはまつうまくひおもしてゐる人なさしとこゝろおき
あきなれるたうせのたとは朝ゆふ御うりうるしきはせきの心えた
いるときまちてうしなのとときこゆ まゐらなとしをおもてよあるうと
うち語りのなまふかふことうちふはまつてうち山ひこのひくき
かのみとゝのとつまれよかしれなたのちたれおこうかうか
いそうのふるちくそぬまゐいとくまつくんのうちをみとりく
月をえつのしはもとのたうきまかいぬ我月とやくやえるに
あしまうきとのつらつ里なくおもかたまかしたさえを御やう

むかしはやすきくもなかりしなりてさのならはむかうえなり日
うましと我身ひとつはもとのぬとおもひしことをかは中の
うきとえだほうふいれつまたなりへすかうるあしの孫のなふ
まよいし道もたえまくてゆしくといふたとふにあすうせに
なりあはひの河ゆらのことりふりつゝもれてたのまぬやしき
なとくらはこなりことくらやくなきのふかるうか
おかよつくしきぬるやとをいていなへ女きうにまれとおもひとなえん
なもかしとんどりしく書流しを海とひ海さなさてこひしかさらん
とたえのしぬしるもとにりちはあまなりし身はすそかう花橘にかあまなる
世にはなと海よこゆるあまのみしきともまうしふ不のきなる色し

思ひきやぬらひきそしすみぬめれにあまふちかくなれ人をのよく
やすきてとに志るえをたつきみしきれなれしさとをあはれとうなく
思ひひとひくさきとなのむや海さ恋なる人なしきそやひしうかなる
名ある秋のなとこのうるむそく世のみはこ花のよむすなき道ほく
あさ海しきさとはゆ名をしなとみ敷ぞうつくはさかぬきのかそあかなる
見ゆあそふちひろくせえめ見ゆおそ思すまさきれのいかとそ思
えくし
なとへてうあるこそよくへきすゑれのさるは身ならぬ人にひさしうかく
まことの色し
せきりあへぬたおほんかをたえれくといひし見るまでひさしうかるべき

人よりもめハ我こひしきものなれハ
あひ見ぬ君かなをのみそよハむ名かしはれれハいとゝ
なをし
うらひとのよしハ枝繁れるの虫ハ
目ねのあと小あ免をよるくらしてもろかは花やかく
たころひてよるまの[illegible]とありやふきのいとこ
とりみさとて小たのおりてあをやさなをり
小かさつきえの入る井つと見ゆるそこきゆめのこつ
わらえをとらぬまのハ我身なりけんと見ゆるは
あめはわりをかすこそ海されよとハのこゝろのこきさへもいつかま[illegible]

たねかのこゝろのこきさへ海されともあさ海しくてこそハ
川らうれ
已上百十六首内他人哥
長哥
加茂女　保憲女
私云哥員數百十六首かく而二百餘首在ときゝ
以他本可校合也

小大君集

いまは昔ぬるこそはといひし人ことのくしうをおほくす
人々をとしいふことありやうなり

正月一日ねをとなるへし

後拾
いかにねておくるあしたにいふことそきのふをこそとけふをことしと
女院そらおはしましゝ御堂に給ける時御仏名のま
ゐの殿にいまたるおかみ人くあつまりゐてさらく
まいりとせむせしは何ことをすへんと思ふよきつり
花を庭にちらしわけるを書給かりたるなあと
たてまつりつる給もえす